

福藏と貧助

硯山人

二

ある日のこととて御座いました貧助が福藏の所へやつてまゐりました。

貧助「サテ、福藏さん。今日は外でもないがあなたには是非一つきいた
いとができたので御邪魔に上つたのです。

と申しますと。福藏はニコくしながら。

「よく入らっしゃいました。サア、私の存じていますことなら何
なりと」と答へますので貧助は口籠りながら。

貧助「實は。あなたも御存じの通り私は多年貧乏です。それに引きか
へどうもあなたは不思議にお金持になる之れはなんでも何んか御
金をもうけるでんじでもあるにちがひがありますまいと思ひまし

たのでそれを今日は伺ひにあがった次第なのです。

之をききました福藏はやはりニコくしながら。

「ハ、ア。そんな事ですか。それは御安い御用です貧助さん。あなたですから何もかも御話し致しますが決してこの事を他言して下さってはいけませんよ。私が御金持になつたのにはそれはわけがあるのです。」

貧助は借はと云ふ顔をしながら膝をにじり寄せ。

「私も。どうも何かしさいのあると思つていました。で、そのわけと申しますのは。」

と乗氣になりてたづねますと福藏は落付き拂つて先づ一服と煙草を吸ひながら。

驅蕨サテ。その譯と云ふのは。」

奮動ぢれつたそうに「ハイその譯と云ふのは。」

驅蕨私は二人の下男を使っています」

貧助驚いて「ヲヤどこに御宅の下男がいますか」

驅蕨イヤ、その下男は人の目では見えません一人ははじめて私が家を持ました時雇ひ入れましたので勤儉と云ふ名の男ですこの男は外貌も悪し到つて口喧しい質でして朝は夜もまだろくく明ないうちから。ガア／＼云つて私を起しますし何か私が欲しい物があつて買うとすると「わたしの御友達を呼んでくる迄まあ御ひかへなさいと云つてはとめます。私はこの男がもとく善い奴だと云ふことを知っていますから何でもこの男の云ふなりになつていました。

すると四五年たつて後の或日のとでしたこの男が黙つて出ていってしまいましたが、どうしたかしらと大層案じていますと翌日ヒョククリと歸つて來まして「兼々申し上げた私の友達を連れて参りました」と云ひますからどんな御友達かと見ますと大變きれいな風采をしたどことなく氣のきいた男じゃありませんか。で、私は大喜びに喜んで名前は何だときゝましたら「富貴」と云ふのだと答へました。

富貴と云ふ男はくるとすぐまづ臺所にいって「こんなとではいけない」と云ひながらその日から私は私に大層美味な食物を料理してくれました又衣服も相應に立派なのを買求めてきてくれます近頃は私に田地を買つてやるとしてしきりに働いています。この「勤儉」と「富貴」



香會

と云ふ二人の下男の爲めに私がこんな御金持になつたのです。」
と申しますと貧助は羨まし相に。

「それは結構なとです所で甚だ申しかねましたがその富貴とか云ふ下男を一寸と私にかして下さいませんか。」
とたのみました。すると福藏は首を振つて。

「イヤ、それは御氣の毒ですができません。まあはじめは御厭やでも勤儉の方を御雇いなさい。それから富貴の方を差上げますから。」

をかした物として勤儉と云ふ下男を雇つてない御家には富貴が参りません無理に富貴を引張つて参りますと二三ヶ月もたない中ちきに逃げていってしまいます。そしてそのあとは「借金」と云ふ大

變人の悪い下男がやつて参りまして道具でも何でも皆よそにもつて
いってしまいます。

これをきいた貧助はブツブツ云ひながら

私にはとても勤儉なんてしみつたれた男は使へないハイ左様なら、
と怒って出ていってしまいました。

貧助はとうとう一生涯貧乏で困難して暮しました。が福藏の方はど
んくと御金持になりました。めでたしく

慾ばつた罰

彌

彦

むかし或所に一人の大層慾の深いお爺がりました。このお爺さん
慾の深いくせに或日自分の虎の子のようになしていた七百圓のお